**『満点レシピ－新総高校食物調理科－ 』**
（須藤靖貴／著　新潮社　2018.5）

高校卒業時、調理師免許が取得できる食物調理科が舞台。不器用ながら日々懸命に腕を磨く主人公が、仲間、先生、家族とぶつかり合いながら成長していく姿が描かれています。3年最後の試食会のシーンでは、彼の緊張感が伝わってきて、ページをめくる手に力が入ります。

**『41歳の東大生』**
（小川和人／著　草思社　2019.11）

妻子があり、郵便配達員として働きつつ、41歳の時に6年がかりで東大に合格した著者が、仕事を続けながら大学に通い、4年間で卒業するまでの記録が、軽快に書かれています。単なるハウツー本ではなく、著者の人柄がにじみ出るような文体で書かれる物語は、学問の世界を興味深く私たちに伝えてくれます。

**『在野研究ビギナーズ－勝手にはじめる研究生活－』**
（荒木優太／編著　明石書店　2019.9）

自身も在野で有島武郎の研究をしている編者が、個性的な在野研究者の書き手を集め、さまざまな在野研究のかたちを提唱しています。「開放的であり、それ故にしばしば危険でもある在野の自由。この自由こそを、（中略）若い学生、また（中略）かつての学生たちに、わがこととして考えてもらい」たい、という編者の気持ちのこもった一冊です。

**『賞状の書き方』**
（清水克信／監修　メイツユニバーサルコンテンツ　2021.10）

卒業式といえば賞状を思い浮かべる方も多いのでは。この本では、賞状を美しく書くための筆づかいやレイアウトといった基本的な知識と技術が、手順を細分化してわかりやすく解説されています。

**『岐路の前にいる君たちに－鷲田清一式辞集－』**
（鷲田清一／著　朝日出版社　2019.12）

哲学者・鷲田清一が、大学の卒業式や入学式で若者に贈った言葉をまとめた本です。さまざまな門出を迎えた卒業生たちに向けられる、厳しくも優しい著者の眼差しが感じられます。誰が読んでも、襟を正したくなる含蓄のある言葉が詰まっています。

## 卒業にまつわる本

二月、三月は卒業の季節。卒業にまつわるさまざまな本を集めてみました。

### 第4回　書名でしりとり

書名の最後の1字で次の本へつなげていく企画
第4回の文字は前回の書名から「**う**」です。

**『美しさが僕をさげすむ』**
（ウンヒギョン／著　呉永雅／訳　クオン　2013.12）

「僕」は母と二人暮らし。変化を望みながら何も変えようとしない母と、歪な会話を繰り返す日々。ある日、生き別れた父の入院の知らせが届き、「僕」が太っていることが気に入らなかった父との記憶を辿りながら、「僕」はダイエットを始め…
現代人が抱える孤独と生きづらさを、共感をもって描き出す6つの短編集です。

# ちらっと
Chiratto
Vol.33

2022年2月-2022年3月号


特集1　全館統一展示「2021年を振り返って」
特集2　卒業にまつわる本
連載　書名でしりとり
お知らせ　西東京市図書館からのお知らせ　FM西東京で紹介した本

# 全館統一展示

# 二〇二一年を振り返って

令和四年一月十八日から
三月二十一日まで

二〇二一年もあんなこと、こんなこと、いろいろなことがありました。図書館の本とともに振り返りつつ、二〇二二年が皆様にとっていい一年になりますように。

**『ノーベル平和賞の裏側で何が行われているのか?』**
（ゲイル・ルンデスタッド／著　彩図社　2020.11）

世界で最も名誉ある「ノーベル平和賞」の舞台裏とは? ゴルバチョフ、マンデラ、オバマなどの受賞者とコンタクトを取ったノルウェー・ノーベル委員会の元事務局長が、ノーベル平和賞の知られざる真実を語ります。

**『オリンピックと東京改造－交通インフラから読み解く－』**
（川辺謙一／著　光文社　2018.9）

首都高、東海道新幹線、モノレール、羽田空港。
1964年の五輪に合わせて多くのインフラが整備されました。「未成熟な巨人」といわれた東京が、五輪とともにいかにして発展してきたのかを、交通インフラを中心に読み解きます。

**『渋沢栄一の深谷－写真で訪ねるふるさとの原風景－』**
（河田重三／著　清水勉／著　さきたま出版会　2021.1）

渋沢栄一の生まれ育った風景、少年時代から携わった藍と養蚕の風景、日本の近代化を進めた煉瓦の風景、足跡を今に引き継ぐ故郷と実業の風景…。 時代の波に向かっていった渋沢栄一の姿が、豊富な写真とともに紹介されています。

**『奇跡の島・西表島の動物たち』**
（鈴木直樹／著　誠文堂新光社　2017.8）

川を泳ぐイリオモテヤマネコ、カンムリワシの捕食、リュウキュウイノシシの子育て…。ロボットカメラによって鮮やかに映し出された、西表島の動 物たちの知られざる生態を収めた写真集です。

**『鬼滅の日本史』**
（小和田哲男／著　宝島社　2020.10）

新たな鬼退治の物語、「鬼滅の刃」。古典における鬼の物語を紐解き、日本人の精神土壌の奥深くにあり続ける鬼の存在を浮かび上がらせることで、物語の背景に迫るほか、日本の闇の歴史からキャラクターの背景を探ります。

**『ドラマ「鬼平犯科帳」ができるまで』**
（春日太一/文藝春秋/2017.1）

時代劇の金字塔、中村吉右衛門版「鬼平犯科帳」の秘密を、プロデューサーから殺陣師まで制作スタッフにインタビュー。苦労話や楽屋話などが満載です。

## 西東京市図書館からのお知らせ

**中央図書館臨時窓口（イングビル）のサービス終了と中央図書館再開までのサービスについて**

耐震補強等改修工事のため休館中の中央図書館は、2022年4月1日（金曜日）に再開します。
再開に伴い、中央図書館臨時窓口（イングビル）でのサービスは、3月6日（日曜日）をもって終了します。なお、3月19日（土曜日）から3月30日（水曜日）までは、中央図書館入り口付近で、予約資料を受渡します。
大変ご不便をおかけしますが、ご理解いただきますよう、よろしくお願いいたします。

## ＦＭ西東京で紹介した本

『三体』シリーズ
（劉慈欣/著　早川書房　2019.7～2021.5）

奇妙なVRゲーム『三体』の真実とは。 不安定な故郷を脱し新天地を求める『三体』文明と地球文明の邂逅、数百年にわたる相克を描く五冊・三部作の大長編です。中国人作家の手による本作は、オバマ元大統領やマーク・ザッカーバーグも愛読しており、2015年には第一部がアジア人として初のヒューゴー賞、2017年には第三部がローカス賞を受賞。西東京市図書館では、外国語資料として英語版も所蔵しています。

『東京の古本屋』
（橋本倫史/著　本の雑誌社　2021.11）

タイトルからすると東京にある古本屋を多数紹介するガイドブックのようですが、実際は、著者が都内の10軒の古本屋を3日間ずつ訪れ、店主やスタッフの仕事を手伝いながら、今の古本屋の姿を淡々と取材した本です。ちょうどコロナ禍と重なる時期のもので、著者は「古本屋に流れる時間の記録であり、2020年から2021年にかけての東京の風景の記録であり、生活の記録だ」と述べています。古本好きな方にはもちろんおすすめですが、古本にあまり関心のない方でもいろいろな発見があると思います。

発行：西東京市図書館
http://www.library.city.nishitokyo.lg.jp